倫風宏話

子どもを受けとめる器について

上廣哲治

一九五〇年代末から六〇年代にかけて、フランスでは若い映画監督たちによって、旧来の映画手法やテーマをくつがえす斬新な作品が次々と製作・公開されました。こうした動きや一連の作品は「ヌーベル・バーグ（新しい波）」と呼ばれ、フランスのみならず世界中の映画界に強烈な刺激を与えました。

なかでもフランソワ・トリュフォー監督の「大人は判ってくれない」は、ヌーベル・バーグを代表する作品として知られています。

主人公は十二歳の少年アントワーヌ・ドワネル。学校へ行けば教師に叱られてばかりだし、家に帰っても、厳しい母親とうだつの上がらない継父の仲が悪く、自分の居場所を見つけることができません。やがて家出をした彼は、お金欲しさに継父の会社のタイプライターを盗み、少年鑑別所へと送られてしまいます。面会に来た母親には「お前を引き取らないからね」と言われ、アントワーヌ自身も精神科の女医に、自分が母親から愛されていないことを告白するのでした。

映画は、鑑別所から逃げ出したアントワーヌが野山を駆け抜けて海辺にたどり着き、立ち尽くしてこちらを振り向くシーンで終わります。クローズアップでとらえられたそのまなざしは、逃げることをあきらめて現実に立ち向かおうとする、思春期の少年の決意を表しているようにも思えます。

外国映画では、原題と日本で付けられたタイトル（邦題）がまったく異なることが多く、なかには首をひねりたくなるような〝珍作〟も見られます。この映画も、原題を直訳すると「四百発の殴打」となるので、ずいぶん異なるタイトルが付けられたことになります。しかしこれは、思春期を迎えた少年の思いを代弁する、すばらしい邦題です。必死に成長しようとする子どもたちにとって、たいていの大人たちはまさに「判ってくれない」存在なのですから。

サン＝テグジュペリの小説『星の王子さま』の献辞には、次のような言葉が記されています。

「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもいない。）」（内藤濯訳）

大人となった私たちは皆、さまざまな悩みや葛藤を抱えながら思春期を通過してきたはずなのに、まるでそんなことがなかったように子どもたちと接してしまいます。かつては当たり前に思えたことが、親となった今ではとうてい理解することができず、子どもに対して断絶感さえ抱いてしまうのです。

たとえば、お母さんが思春期の息子さんに、「雨が降りそうだから傘を持って行きなさい」とか「寒くなるからコートを着ていったら」などとアドバイスすると、息子さんはそれを無視したり、反抗的な態度を見せたりすることがあります。お母さんとしては子どものためを思って声を掛けたつもりでも、思春期の子どもには、それが自分の行動に対する「監視」や「支配」に思えてしまうからです。

しかし、「私も子どもの頃はそうだった」と思い返せる親は、意外に少ないものです。むしろ、わが

子がなぜ反抗的な態度をとってしまうのかを理解できず、「小さいときは素直でいい子だったのに」と嘆息し、自分は嫌われているのではないかと思い込んでいる人が多いのではないでしょうか。

心理学者の河合隼雄さんは、子どもが大人になろうとする思春期について、わかりやすい比喩を用いて説明しています。「青年期というのは、今までに建てたひとつの家を壊して新しい家に建てかえるのだ、と思うとよく解るときがある。子どものときに、子どもなりの家ができあがるのだが、それは仮小屋であって、それをベースとして仕事をなしつつ、結局はその仮小屋も壊してしまって、新しい家をつくらねばならない。仮小屋がしっかりしていないと新しい仕事をしてゆくのに差支えるのはもちろんだが、仮小屋に力を入れすぎて、まるで本屋にでもできそうなのをつくっておくと、建てかえが大変である。家庭内暴力をふるう子どもの多くは、仮小屋をたてるときに、親が妙に張り切りすぎて、本屋まがいのものを建てさせたようなところがある」(『大人になることのむずかしさ』)。

わが子を自分の思いどおりの「いい子」に育てようと、「張り切りすぎて」しまう親は少なくありません。大人の言うことをよく聞く子、きちんと挨拶ができる子、勉強を一生懸命やる子……。そんな「いい子」にこそ将来の幸福が約束されていると思い込み、大人好みの枠の中に押し込めてしまう。しかし、大人になろうとする子どもにとって、その「枠＝仮小屋」が窮屈で頑丈であるほど、壊して前へ進むには相当の反発力が必要になり、それはしばしば「暴力」というかたちで表れるというのです。

今まであった仮小屋を壊して新しい家に建てかえるときには、当然、既成のものに対する否定的な感情がふくらんでいきます。その感情の矛先は、まずもっとも身近な両親や教師などに向けられるでしょう。お母さんのささやかなアドバイスにさえ反発するのは、その表れなのですから、親は慌てたり怒ったりするのではなく、「大人になろうとして、もがいている」ことを受け容れ、見守っていくことが大切です。子どもたちは誰だって、親に反抗したり、親を否定したりしながら成長していくのです。

しかし、親や周囲に対する否定的な感情がさらに膨らんでいくと、「大人は判ってくれない」のアントワーヌ少年のように、家出や窃盗というステージに踏み込んでしまう可能性もあります。その場合も、子どもは行為によって、言葉にならないメッセージを大人たちに送っているはずです。親がその訴えに気づかなければ、子どもの行為はますますエスカレートしていきます。実際に盗みを働いたことのある子どもが、カウンセラーの河合隼雄さんにこう語ったことがあるといいます。「せっかく盗みまでしたのに、親はまだわかってない」。

子どものメッセージに耳を傾けるには、親も成熟し、それらを受けとめる器を持っていなければなりません。そのためには、なによりも自分自身が必死に生きていること、倫理力を磨く努力を重ねている姿を見せることが大切です。子どもは「真の権威」には反抗せず、「ばかばかしい権威」に対してだけ反抗するといわれます。そして真の権威とは、傲慢な態度を見せることでも、自分の思いを強制することでもなく、子どもの「つまずき」さえも受けとめられる大きな器を持っていることなのです。

子どもの行為が許容範囲の一線を越えようとするときには、当然、厳しい態度で臨む必要があります。それとともに、どこまでも子どもを受けとめる器を持つこと、子どもが帰ってこられる場所であることが肝要です。鑑別所を訪れたアントワーヌ少年の母親は、「お前を引き取らないからね」と突き放すのではなく、「それでもお前が誰よりも好きだ」と言って少年を抱き寄せるべきだったし、これまでの自分の生き方や、子どもへの接し方を反省してみるべきだったのです。